



女子大学生の体育・スポーツに関する研究 (3) :  
好意度と得意度の関係を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉武, 信二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011268">https://doi.org/10.24729/00011268</a>

論 文

# 「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(3)」

## —好意度と得意度の関係を中心に—

Studies on Physical Education and Sports of Women's Students in University (3)

—Mainly in the relation between the favor degree and the best degree—

吉 武 信 二

Shinji YOSHITAKE

### 研究目的

本来、スポーツは純粋に楽しさを追及すべきものであるが、学校教育における体育授業では心身の調和的発達をめざした目標を掲げているために、かえって堅苦しくしていることが指摘されており、「体育嫌い」の「スポーツ好き」<sup>13)</sup> という現象が生まれている。したがって、体育授業とスポーツ活動とでは、学習者が必ずしも一致した志向性を示すとは限らない。これまで体育・スポーツに対する学習者の態度や志向性に関する研究は数多く行われてきた。体育に対する態度研究は、石井ら<sup>3)</sup>、小林<sup>5)6)</sup>、丹羽ら<sup>11)</sup>、徳永ら<sup>12)</sup>のもの、スポーツに対する態度研究は、橋本ら<sup>1)2)</sup>、松島<sup>7)</sup>のもの、これらの態度研究にスポーツにおける志向性を加えた研究に、石井ら<sup>4)</sup>、中田ら<sup>8)9)</sup>、山本ら<sup>14)</sup>などがある。さらに、これらの研究をもとに、吉武ら<sup>15)</sup>は女子大学生の学問専攻領域別に態度や志向性を比較し、吉武<sup>16)</sup>は指導者への好意度から体育・スポーツに対する考えを比較検討している。

これら先行研究は、運動経験や運動種目、運動部所属経験、大学生の学問専攻分野(学部・学科)、指導者への好意度による違いなどを、質的、量的側面にとらえ、それが態度や志向性を規定する要因であるかいなかを検討したものが多。しかしながら、「好きか嫌いか」といった活動そのものへの好意度と「得意か不得意か」といった得意度の関連性から検討したものは数少ない。西ら<sup>10)</sup>は体育授業と生涯スポーツの関連について、愛好度と得意度の観点から分析しているが、これらは小・中・高校生を対象としており大学生については触れられていない。したがって、これらの対象について調査・分析することは、スポーツの「好き・嫌い」と「得意・不得意」の関連を明らかにする上で非常に有用であると考えられる。

そこで本研究では、女子大学生の体育授業及びスポーツ活動に対する意識について調査し、主に「好き・嫌い」と「得意・不得意」の観点から分析することにより、女子大学生の体育授業及びスポーツ活動における好意度と得意度の関係についての基礎的な知見を得る事を目的とした。

## 研 究 方 法

2002年7月、O女子大学において、1年次に卒業必修科目として配当されている体育・スポーツ実技を中心とする科目である「基礎体育学」を履修している者のうち、アンケートに回答した187名を分析の対象とした。

アンケートは、先行研究で使用された「スポーツにおける志向性調査票」、「学生の運動に対する態度調査」を参考に、本研究の目的に関連した項目を検討した上で、「体育授業」と「スポーツ活動」について、その意識を調査するものを作成した。回答は得点の高い方から「非常にそう思う（5点）」「どちらかといえばそう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思わない（2点）」「全くそう思わない（1点）」の5段階から選択する無記名自己記入法により行い、その場で回収した。質問数は「体育授業に対する意識」と「スポーツ活動に対する意識」について、それぞれ31項目、計62項目である。

また、これらの項目の中には肯定的な質問項目48項目と否定的な質問項目14項目が含まれている。否定的な質問項目における否定回答は、体育授業やスポーツ活動に対する肯定的態度と解釈できるので、得点を反転させて「全くそう思わない（5点）」「どちらかといえばそう思わない（4点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思う（2点）」「非常にそう思う（1点）」とした。反転させた項目は、「体育授業」に関しては、項目3・4・9・10・13・15・17・18・20・24の計10項目、「スポーツ活動」に関しては、項目9・13・17・24の計4項目である。

分析は、全体の傾向および「体育授業」や「スポーツ活動」に対する好意度と得意度の要因から分けられた4グループの特徴、各グループ間の比較、を中心に行った。また、統計処理については、統計ソフトSPSS for windows 11.0Jを用い、統計的な有意水準は危険率5%未満とした。

## 結 果 と 考 察

### I. 全体の傾向

#### (1) 主成分分析による結果

体育の授業とスポーツ活動に対して、どのような考えを持っているのかを調べるために、主成分分析による因子分析を行った結果、それぞれ6つの成分が抽出された。抽出に際する条件は固

有値1以上とし、バリマックス回転後の成分行列より、因子負荷量0.6以上の項目を対象に、因子名を検討した。ただし、因子負荷量0.6以上の項目が2つ以上含まれない因子については命名不能とした。表1は体育授業、表2はスポーツ活動についての結果である。

表1より、体育の授業に関しては、寄与率の高い順に「良好な人間関係と生活の充実(32.9%)」「技能と成績(11.2%)」「精神面の安定・向上(7.5%)」「健康と体力向上(4.4%)」「他人との協調(4.0%)」と命名した5つの因子と「命名不能(3.7%)」の1つの因子から考えた。6因子の累積寄与率は63.7%であるので、体育の授業に対する考えの約6割強がこれらの因子で説明できると解釈される。中でも第1因子の「良好な人間関係と生活の充実」は32.9%の寄与率を示し、抽出された因子全体の半分以上を占めるため、体育の授業に対する考えを左右する最も重要な因子と推察される。

一方、表2より、スポーツ活動に関しては、寄与率の高い順に「自発的な競争(33.8%)」「苦痛の少ない体力づくり(7.9%)」「精神面の安定・向上(7.2%)」「良好な人間関係と協調性(5.4%)」「楽しみ(4.9%)」と命名した5つの因子と「命名不能(4.2%)」の1つの因子から考えた。6因

表1 体育授業に関する因子

因子名(寄与率)	因子負荷量
第1因子 「良好な人間関係と生活の充実」(32.9%)	
7. 体育の授業に対して、自発的に取り組むことができた	0.801
22. 体育の授業は生活に潤いをあたえてくれると思う	0.782
6. 体育の授業が好きだった	0.771
12. 体育の授業の後は、快い興奮が残った	0.771
5. 体育の授業は友達を作る場として高く評価することができた	0.743
2. 体育の授業は良い人間関係を作ることができる場であったと思う	0.731
21. 体育の授業はストレス発散に良かったと思う	0.726
8. 体育の授業でスポーツが好きになった	0.635
19. 体育の授業では自分の能力に合った活動をするのができたと思う	0.617
第2因子 「技能と成績」(11.2%)	
17. 体育の授業では自分の能力が足りないと感じることが多かった	0.862
18. 体育の授業ではうまくできるか不安に思うことが多かった	0.787
14. 体育の成績が良かった	0.650
第3因子 「精神面の安定・向上」(7.5%)	
29. 体育の授業によって情緒が安定した人間になると思う	0.808
25. 体育の授業で礼儀正しい態度が身につくと思う	0.760
28. 体育の授業によって物事に対して意欲的な人間になると思う	0.665
第4因子 「健康と体力向上」(4.4%)	
23. 体育の授業は体力づくりに役立つものだと思う	0.790
27. 体育の授業は健康増進のために良いと思う	0.768
第5因子 「他人との協調」(4.0%)	
4. 体育の授業では皆同じでなければならないという意識があったと思う	0.707
3. 体育の授業は他の人に合わせなければならず、十分に楽しめなかったと思う	0.692
第6因子 <1項目のみのため命名不能>(3.7%)	
9. 体育の授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった	0.694

※ 網掛は反転項目

表2 スポーツ活動に関する因子

因子名 (寄与率)	因子負荷量
第1因子 「自発的な競争」(33.8%)	
20. スポーツをする時は、常に勝ちたい	0.769
18. スポーツにおいて競争をすることが楽しい	0.740
14. スポーツは得意である	0.647
15. スポーツ活動に打ち込んだことがある	0.642
6. スポーツをすることが好きである	0.634
7. スポーツ活動に対して自発的に取り組むことができる	0.623
第2因子 「苦痛の少ない体力づくり」(7.9%)	
13. スポーツ活動は喜びよりも苦しみが多いと思う	0.726
23. スポーツは体力づくりに役立つものだと思う	0.609
第3因子 「精神面の安定・向上」(7.2%)	
29. スポーツ活動をする、情緒が安定した人間になると思う	0.682
28. スポーツ活動をする、物事に対して意欲的な人間になると思う	0.633
第4因子 「良好な人間関係と協調性」(5.4%)	
2. スポーツ活動を通して、良い人間関係を得ることができると思う	0.648
8. スポーツ活動によって体育の授業が好きになった	0.620
5. スポーツ活動をする、人と協力する習慣が身につくと思う	0.606
4. スポーツ活動をする、思いやりのある人間になると思う	0.602
9. スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい	-0.691
第5因子 「楽しみ」(4.9%)	
10. スポーツはただ純粋に楽しむべきだと思う	0.769
3. スポーツは気の合ったもの同士で楽しくできればよいと思う	0.748
11. スポーツ活動は遊びの延長として楽しんでいる	0.742
第6因子 <1項目のみのため命名不能>(4.2%)	
17. スポーツ活動では自分の能力が足りないと感じることが多い	0.837

※ 網掛は反転項目

子の累積寄与率は63.4%であるので、スポーツ活動に対する考えの約6割強がこれらの因子で説明できると解釈される。中でも第1因子の「自発的な競争」は33.8%の寄与率を示し、抽出された因子全体の半分以上を占めるため、スポーツ活動に対する考えを左右する最も重要な因子と推察される。

(2) 平均の比較による結果

表3より、「体育授業」においては、平均点の高いものから順に、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「自分の能力を抑えなければならない」「ストレス発散に良かったと思う」「体力づくりに役立つものだと思う」であった。「得るものが何もない」「自分の能力を抑えなければならない」については反転項目であるため、「何か得るものがある」「能力を抑えなければならないことはあまりなかった」と感じていることになる。特に「得るものが何もないと思う」についての回答は、平均値で4.00を超える高い値を示した。そして、因子的には「良好な人間関係と生活の充実」「健康と体力向上」「他人との協調」の因子についての項目がこの中に多

表3 体育授業に関する意識

質 問 項 目	平均値 (S.D.)	因子番号
24. 体育の授業では得るものが何もないと思う	4.05 (0.991)	-
27. 体育の授業は健康増進のために良いと思う	3.81 (1.033)	4
20. 体育の授業では自分の能力を抑えなければならないことがあった	3.79 (1.177)	-
21. 体育の授業はストレス発散に良かったと思う	3.63 (1.209)	1
23. 体育の授業は体力づくりに役立つものだと思う	3.59 (1.100)	4
4. 体育の授業では皆同じでなければならないという意識があったと思う	3.55 (1.218)	5
6. 体育の授業が好きだった	3.53 (1.395)	1
13. 体育の授業は喜びよりも苦しみが多かった	3.48 (1.243)	-
2. 体育の授業は良い人間関係を作ることができる場であったと思う	3.44 (1.117)	1
7. 体育の授業に対して、自発的に取り組むことができた	3.41 (1.291)	1
12. 体育の授業の後は、快い興奮が残った	3.39 (1.243)	1
3. 体育の授業は他の人に合わせなければならず、十分に楽しめなかったと思う	3.35 (1.113)	5
22. 体育の授業は生活に潤いをあたえてくれると思う	3.31 (1.246)	1
1. 体育の先生が好きだった	3.28 (1.297)	-
5. 体育の授業は友達を作る場として高く評価することができた	3.25 (1.134)	1
11. 体育の授業は遊びの延長として楽しんでいた	3.19 (1.313)	-
26. 体育の授業は普段の生活から解放された場であると思う	3.06 (1.206)	-
19. 体育の授業では自分の能力に合った活動をすることができたと思う	3.05 (1.039)	1
16. 体育の授業によってチャレンジ精神をかきたてられた	2.99 (1.135)	-
14. 体育の成績が良かった	2.97 (1.385)	2
10. 体育の授業では自由な選択ができなかったと思う	2.93 (1.294)	-
9. 体育の授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった	2.90 (1.135)	6
8. 体育の授業でスポーツが好きになった	2.86 (1.233)	1
28. 体育の授業によって物事に対して意欲的な人間になると思う	2.76 (0.993)	3
31. 体育の授業によって自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	2.75 (1.119)	-
18. 体育の授業ではうまくできるか不安に思うことが多かった	2.62 (1.236)	2
15. 体育の授業の評価方法が、技能重視であるのは賛成できない	2.54 (1.200)	-
29. 体育の授業によって情緒が安定した人間になると思う	2.51 (0.979)	3
30. 体育の授業によってプロポーションが良くなると思う	2.46 (1.118)	-
17. 体育の授業では自分の能力が足りないと感じることが多かった	2.45 (1.132)	2
25. 体育の授業で礼儀正しい態度が身につくと思う	2.36 (1.026)	3

※ 網掛は反転項目

く認められた。したがって、全体的に体育授業に対しては、ストレス発散や体力づくり、健康への貢献をはじめ、何か得るものがあるという意識を持っており、「心身ともに良い影響」を認めているものと考えられる。また、気を遣って自分の能力を思い切り発揮できないということはあまりない、すなわち思い切り自己の能力を発揮できる場としてとらえていることが推察される。

これに対して、平均点の低いものは、順に「礼儀正しい態度が身につくと思う」「自分の能力が足りないと感じることが多かった」「プロポーションが良くなると思う」「情緒が安定した人間になると思う」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」であった。「自分の能力が足りないと感じることが多かった」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」については反転項目で

あるため、「自分の能力が足りない」「技能重視は賛成できない」と感じる人が多かったと言える。そして、因子的には「技能と成績」「精神面の安定・向上」の因子についての項目がこの中に多く認められた。したがって、全体的に体育授業によって礼儀正しい態度が身についたり、プロポーションが良くなったり、情緒が安定するとは考えておらず、自分の能力不足を感じながら、技能だけで成績評価をされることに抵抗を示している様子が見えてくる。

一方、表4より、「スポーツ活動」においては、平均点の高いものから順に、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「体力づくりに役立つと思う」「ストレス発散に良いと思う」「スポーツをすることが好きである」であった。これらにあがってきた項目は前述の体育

表4 スポーツ活動に関する意識

質問項目	平均値 (S.D.)	因子番号
24. スポーツ活動では得るものが何もないと思う	4.19 (0.930)	-
27. スポーツ活動は健康増進のために良いと思う	4.06 (0.880)	-
23. スポーツは体力づくりに役立つものだと思う	4.04 (0.925)	2
21. スポーツはストレス発散に良いと思う	3.94 (0.992)	-
6. スポーツをすることが好きである	3.85 (1.229)	1
10. スポーツはただ純粋に楽しむべきだと思う	3.79 (1.085)	5
12. スポーツ活動の後は、快い興奮が残る	3.77 (1.049)	-
2. スポーツ活動を通して、良い人間関係を得ることができると思う	3.72 (0.981)	4
22. スポーツ活動は生活に潤いを与えてくれるものだと思う	3.71 (1.065)	-
3. スポーツは気の合ったもの同士で楽しくできればよいと思う	3.68 (0.974)	5
5. スポーツ活動をすると、人と協力する習慣が身につくと思う	3.67 (0.974)	4
11. スポーツ活動は遊びの延長として楽しんでいる	3.62 (1.057)	5
13. スポーツ活動は喜びよりも苦しみが多いと思う	3.56 (1.026)	2
7. スポーツ活動に対して自発的に取り組むことができる	3.50 (1.175)	1
15. スポーツ活動に打ち込んだことがある	3.44 (1.429)	1
9. スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい	3.43 (1.046)	4
26. スポーツ活動は普段の生活から解放された場であると思う	3.41 (1.110)	-
19. スポーツ活動では自分の能力に合った活動をするができると思う	3.40 (1.064)	-
16. スポーツ活動によってチャレンジ精神をかきたてられる	3.36 (1.175)	-
28. スポーツ活動をすると、物事に対して意欲的な人間になると思う	3.32 (1.059)	3
31. スポーツ活動で自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	3.28 (1.087)	-
1. スポーツの指導者が好きだった	3.27 (1.153)	-
20. スポーツをする時は、常に勝ちたい	3.17 (1.288)	1
18. スポーツにおいて競争をすることが楽しい	3.16 (1.235)	1
8. スポーツ活動によって体育の授業が好きになった	3.12 (1.241)	4
30. スポーツ活動をすると、プロポーションがよくなると思う	3.06 (1.173)	-
4. スポーツ活動をすると、思いやりのある人間になると思う	2.98 (0.929)	4
25. スポーツ活動をすることで、礼儀正しい態度が身につくと思う	2.92 (1.124)	-
29. スポーツ活動をすると、情緒が安定した人間になると思う	2.90 (0.959)	3
14. スポーツは得意である	2.89 (1.406)	1
17. スポーツ活動では自分の能力が足りないと感じることが多い	2.47 (1.187)	6

※ 網掛は反転項目

授業の場合と同様な要因を多く含んでいる。平均値で4.00を超える高い値を示した項目は、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「体力づくりに役立つものだと思う」であり、体育授業の場合より項目数も多い。因子的には、「苦痛の少ない体力づくり」「楽しみ」の因子に含まれる項目がこの中に多く認められた。したがって、全体的にスポーツ活動に対しても、ストレス発散や体力づくり、健康への貢献をはじめ、何か得るものがあるという意識を持っているものと考えられる。また、スポーツをすること自体は好意的にとらえている様子が見える。

これに対して、平均点の低いものは、順に「自分の能力が足りないと感じることが多い」「スポーツは得意である」「情緒が安定した人間になると思う」「礼儀正しい態度が身につくと思う」「思いやりのある人間になると思う」であった。「自分の能力が足りないと感じることが多い」については反転項目であるため、「能力が足りない」と感じる人が多かったと言える。また、特定の因子が多く見られる傾向はこの中には認められなかった。したがって、全体的にスポーツ活動に対して、得点が低いものについても、やはり体育授業と同様の意識が含まれており、スポーツをすることによって礼儀正しい態度が身についたり、思いやりのある人間になったり、情緒が安定するとは考えておらず、自分の能力不足を感じながら、スポーツは不得意だと意識している様子が見える。

以上のように、「体育授業」に対する考えと「スポーツ活動」に対する考えには、共通的な要因が多く含まれており、関連があることが予想される。そこで、両者にどのような関連があるのかを比較してさらに検討してみた。

まず、「体育授業」と「スポーツ活動」の上位5項目を見てみると、両者共に「何か得るものがある」「健康増進のために良い」「体力づくりに役立つ」「ストレス発散に良い」がある。したがって、どちらに対しても「何か得るものがある」と感じ、「健康増進」「体力づくり」「ストレス発散」によい影響を与えるとの考えを持っていると言える。これに対して、「体育授業」と「スポーツ活動」の下位5項目を見てみると、両者共に「自分の能力が足りない」「情緒が安定した人間になる」「礼儀正しさが身につく」が含まれている。したがって、どちらに対しても「能力不足」を感じており、「情緒安定」や「礼儀正しさ」に良い影響はないとの考えを持っていると言える。

次に、「体育授業」に対する考えと「スポーツ活動」に対する考えの違いを探るために、それぞれ31項目の中から同様な質問項目25項目を選び、有意差検定を行った。その結果、全体的に「スポーツ活動」の方が高い得点傾向を示し、25項目中20項目において有意差が認められた。有意差のあった項目は、「体育授業またはスポーツ活動が好きである」「人間関係」「遊びの延長」「生活への良い影響」などである。いずれも「スポーツ活動」の得点の方が高く、より肯定的にとらえていることを示している。これに対して、有意差のなかった項目は、「先生・指導者が好きだった」



「自発的に取り組むことができた」「喜びよりも苦しみが多かった」「得意である」「自分の能力が足りないと感じる」の計5項目であった。前者3項目については、共に平均値が3.00以上であり、両者とも肯定的にとらえていると言える。一方、後者2項目については、共に平均値が3.00未満であり、両者とも否定的にとらえていると言える。

以上、体育授業とスポーツ活動に対する意識について比較した結果、全体的に共通する要因が多く、ややスポーツ活動の方がより好意的にとらえている傾向が見られた。ただし、先生や指導者に対する好意度や体育・スポーツの得意度、能力不足という意識、楽しみや喜びを感じている意識といった要因については体育授業とスポーツ活動の間に差はないと推察される。

## II. 好意度と得意度の関係

### (1) 体育の授業について

好意度と得意度に関するグループ分けを表5に示し、各グループの全体に占める割合を図1に示した。また、グルーピングの基礎となるQ6「体育の授業が好きだった」とQ14「体育の成績がよかった」の間には有意な相関 ( $r=0.618, p<0.01$ ) があった。

#### ① 4グループの特徴

##### i 「嫌い-不得意」

体育授業を「嫌い」で「不得意」と回答したグループは、全体の20%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中24項目において平均値が3.00未満であり、大半において体育授業を否定的にとらえていた。その中でも特に平均値が低く、平均値2.00以下の項目は、「体育授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「体育の授業でスポーツが好きになった」「喜びよりも苦しみの方が多かった」「体育の成績が良かった」「自分の能力が足りないと感じることが多かった」「うまくできるか不安に思うことが多かった」の7項目であった。これらは「良好な人間関係と生活の充実」「技能と成績」の因子に多く共通するもの

表5 体育授業に関するグループ分け

	Q1-6の回答が2以下	Q1-6の回答が4以上
Q1-14の回答が2以下	i (嫌い-不得意) グループ	iii (好き-不得意) グループ
Q1-14の回答が4以上	iv (嫌い-得意) グループ	ii (好き-得意) グループ

と思われる。

これに対して、平均値が3.00以上と体育授業を肯定的にとらえている項目は、「皆同じでなければならない」という意識があった」「自分の能力を抑えなければならないことがあった」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の5項目であった。これらの多くは「健康と体力向上」の因子に共通するものと思われる。

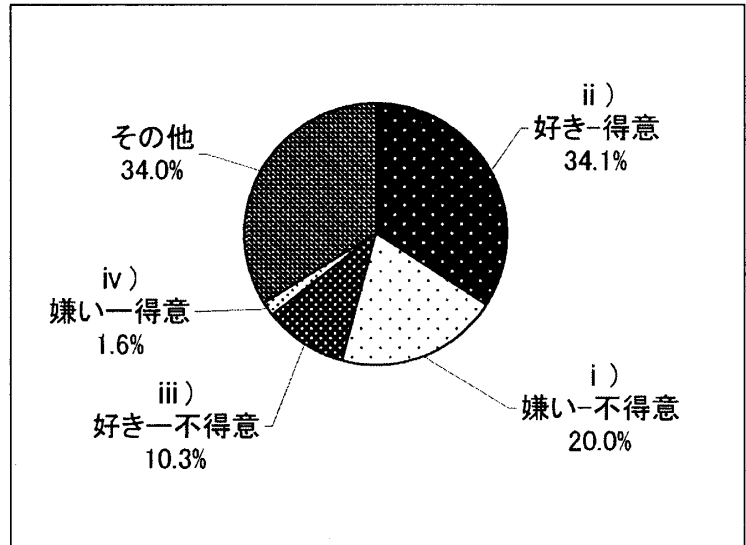


図1 グループ別の割合（体育授業）

したがって、このグループにおける体育授業とは、大半が否定的な意識を持つものであり、自発的に取り組めない、不安の多いものである。しかし、その一方で、体育授業が体力づくりや健康増進に役立つという意識を持っており、加えて何か得るものがあるととらえている。すなわち、否定的な要素は多いものの、「健康と体力向上」についての効果は認めているものと推察される。

## ii - 「好き - 得意」

体育授業を「好き」で「得意」と回答したグループは、全体の34.1%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中24項目において平均値が3.00以上であり、大半において体育授業を肯定的にとらえていた。その中でも特に平均値が高く、平均値4.00以上の項目は、「体育の授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「喜びよりも苦しみが多かった」「体育の成績が良かった」「ストレス発散に良かった」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の7項目であった。これらの多くは「良好な人間関係と生活の充実」「技能と成績」の因子に共通するものと思われる。

これに対して、体育授業を否定的にとらえた項目は、「体育授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった」「自由な選択ができなかった」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」「礼儀正しい態度が身につく」「意欲的な人間になる」「情緒が安定した人間になる」「ポジションが良くなる」「体調をコントロールする能力が身につく」の8項目であった。これらの多くは「精神面の安定・向上」の因子に共通するものと思われる。

したがって、このグループにおける体育授業とは、大半が好意的なものであり、自発的に

取り組み、喜びを多く感じるものである。そして、ストレス発散や健康増進など、体育授業が良い効果をもたらすという意識を持っている。その一方で、体育授業よりもスポーツ活動の方が楽しいと感じ、体育授業では自由な選択ができないことや技能重視の評価に不満を感じている。そして、体育授業が礼儀正しさの獲得など「精神面の向上」に影響することはあまりないととらえている。すなわち、肯定的な要素が多く、特に「ストレス発散・健康増進」の効果を認めながら、精神面の向上や体型維持などへの影響はあまりないとの考えを持つことが推察される。

### iii - 「好き - 不得意」

体育授業を「好き」で「不得意」と回答したグループは、全体の10.3%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中23項目において平均値が3.00以上であり、大半において体育授業を肯定的にとらえていた。その中でも特に平均値が高く、平均値4.00以上の項目は、「良い人間関係を作ることができる場である」「他の人に合わせなければならず、十分に楽しめなかったと思う」「友達を作る場として高く評価することができる」「体育の授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「快い興奮が残った」「喜びよりも苦しみが多かった」「自分の能力を抑えなければならないことがあった」「ストレス発散に良かった」「生活に潤いを与えてくれる」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の12項目であった。これらの多くは「良好な人間関係と生活の充実」の因子に共通するものと思われる。

これに対して、体育授業を否定的にとらえた項目は、「体育の成績が良かった」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」「自分の能力が足りないと感じることが多かった」「うまくできるか不安に思うことが多かった」「礼儀正しい態度が身につく」「情緒が安定した人間になる」「プロポーションが良くなる」「体調をコントロールする能力が身につく」の8項目であった。これらの多くは「技能と成績」「精神面の安定・向上」の因子に共通するものと思われる。

したがって、このグループにおける体育授業とは、グループiiと同様、大半が好意的な意識を持つものであり、人間関係に良い影響を与えるものである。そして、ストレス発散や健康増進など、体育授業が良い効果をもたらすという意識を持っている。その一方で、体育授業では能力不足や不安を感じ、技能重視の評価に不満を感じている。そして、体育授業が礼儀正しさの獲得など「精神面の向上」に影響することはあまりないととらえている。すなわち、肯定的な要素が多く、特にストレス発散や健康増進の効果を認めており、精神面の向上や体型維持などへの影響はあまりなく、能力不足や不安を感じるものにとらえていることが推察される。

iv - 「嫌い - 得意」

体育授業を「嫌い」で「得意」と回答したグループは、全体の1.6%であり、サンプル数が極端に少なかったため、比較分析から除外した。

グループの特徴を全体的に見てみると、Q 6 「体育の授業が好きだった」に対する回答が好意的であれば他の質問項目に対して好意的な回答であり、否定的な回答であれば他の質問項目に対して否定的な回答であった。すなわち、Q14 「体育の成績が良かった」に対する回答が肯定的か否定的かということよりも、Q 6 「体育の授業が好きだった」に対する回答の方が他の質問項目に対する回答に大きく関係していると言える。しかし、グループivを除くどのグループも「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」「礼儀正しい態度が身につく」「情緒が安定した人間になる」「プロポーションが良くなる」「体調をコントロールする能力が身につく」の5項目は、共通して否定的な回答であった。これらの多くは「精神面の安定・向上」の因子である。このことから、体育授業に対する「好き・嫌い」や「得意・不得意」の意識に関係なく、体育授業が技能重視であることには反対であり、体育授業によって礼儀正しさの獲得・情緒安定・プロポーションの向上・体調コントロール能力の獲得という「精神面」での効果があるとは考えていないと推察される。

② グループ間の比較

グループ間の差の検定をするために、全31項目におけるT検定を行った。

i と ii (嫌い - 不得意 と 好き - 得意)

グループ i とグループ ii のT検定の結果、31項目中26項目において有意差が認められた。この両グループはQ 6 「体育の授業が好きだった」とQ14 「体育の成績が良かった」に対して、ともに相反する回答をしているグループであるため、質問項目の大半において回答に有意な差が見られた。

有意差のあった26項目について、各項目の平均値により、両グループとも否定的にとらえている項目、両グループとも肯定的にとらえている項目、グループ i は否定的でグループ ii は肯定的にとらえている項目の3つに分けることができる。

まず、両グループとも否定的にとらえている項目、すなわち平均値が3.00未満であった項目は、「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」「礼儀正しい態度が身につく」「意欲的な人間になる」の3項目であった。グループ間の値に有意な差はあるが、両グループとも技能重視の評価方法に反対であり、体育授業によって礼儀正しい態度が身につくことや意欲的な人間になるということに対して否定的であった。

次に、両グループとも肯定的にとらえている項目、すなわち平均値が3.00以上であった項目は、「皆同じでなければならないという意識があった」「自分の能力を抑えなければならなかった」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の5項目であった。こちらは、グループ間の値に有意な差はあるが、両グループとも「皆同じでなければならない」「能力を抑えなければならぬ」「得るものが何もない」とはあまり感じておらず、体力づくりや健康増進に良いと感じている。

上記の項目以外の18項目においては、グループ i は否定的でグループ ii は肯定的な回答であった。これに該当する項目は、「良好な人間関係と生活の充実」および「技能と成績」の因子に含まれるすべての項目と「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などの要因を示した項目である。

一方、有意差のなかった項目は「体育授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった」、「自由な選択ができなかった」、「情緒が安定した人間になる」、「プロポーションが良くなる」、「体調をコントロールする能力が身につく」の5項目であり、グループ i と ii 共に否定的な回答であった。

以上のことから、「嫌い－不得意」グループと「好き－得意」グループの意識の大きな違いは、「良好な人間関係と生活の充実」「技能と成績」「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などであると推察される。また、情緒安定・プロポーション向上・体調コントロール能力の獲得などに対する否定的回答にグループ間の違いはないと推察される。

#### i と iii (嫌い－不得意 と 好き－不得意)

グループ i とグループ iii の T 検定の結果、31項目中20項目において、有意差が認められた。この両グループは、同じように体育を不得意だと感じてはいるものの、好きだととらえているか嫌いだととらえているかで相反する意識を持っており、回答には比較的大きな差が見られた。

有意差のあった20項目のうち、「皆同じでなければならない」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の4項目については、有意な差はあったが両グループとも肯定的にとらえていた。

上記以外の16項目については、グループ i は否定的回答であり、グループ iii は肯定的回答であった。これに該当する項目は、「良好な人間関係と生活の充実」の因子に含まれるすべての項目と「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などの要因を示した項目である。

一方、有意差のなかった項目は「体育授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった」「体育の成績が良かった」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」「自分の能力が足りない」と

感じるが多かった」「うまくできるか不安に思うことが多かった」「自分の能力を抑えなければならぬことがあった」「礼儀正しい態度が身につく」「普段の生活から解放された場である」「情緒が安定した人間になる」「プロポーションが良くなる」「体調をコントロールする能力が身につく」の11項目であった。したがって、「技能と成績」の因子を含むこれらの項目に関しては、両グループ間に意識の差はないものと考えられる。

以上のことから、「嫌い－不得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の大きな違いは、「良好な人間関係と生活の充実」「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などであると推察される。一方、「技能と成績」「情緒安定」「プロポーション向上」「体調コントロール能力の獲得」などに対する否定的回答にグループ間の違いはないと推察される。

#### ii と iii (好き－得意 と 好き－不得意)

グループ ii とグループ iii の T 検定の結果、31 項目中 7 項目においてのみ有意差が認められた。この両グループは、同じように体育を好きだと感じてはいるものの、得意なのか不得意なのかで相反する意識を持っている。しかし、グループ間の差は比較的小さかった。

有意差のあった項目は、「他の人に合わせなければならず、十分に楽しめなかった」「体育授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった」「体育の成績が良かった」「自分の能力が足りないと感じるが多かった」「うまくできるか不安に思うことが多かった」「自分の能力を抑えなければならぬことがあった」「得るものが何もない」の 7 項目である。これらは「技能と成績」の因子をすべて含んでいる。

一方、有意差のなかった項目は 31 項目中 24 項目であった。これに該当する項目は、「良好な人間関係と生活の充実」「精神面の安定・向上」「健康と体力向上」の因子に含まれるすべての項目と「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などの要因を示した項目であった。

以上のことから、「好き－得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の違いは、ほぼ「技能と成績」に関するものにとらえられ、その他の要因についてはグループ間の意識の大きな違いはないと推察される。

#### (2) スポーツ活動について

好意度と得意度に関するグループ分けを表 6 に示し、各グループの全体に占める割合を図 2 に示した。また、グルーピングの基礎となる Q 6 「スポーツが好きである」と Q 14 「スポーツは得意である」の間には有意な相関 ( $r=0.654, p<0.01$ ) があった。

① 4グループの特徴

v - 「嫌い - 不得意」

スポーツ活動を「嫌い」で「不得意」と回答したグループは、全体の16.8%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中21項目において平均値が3.00未満であり、大半においてスポーツ活動を否定的にとらえていた。その中でも特に平均値が低く、平均値2.00以下の項目は、「スポーツをすることが好きである」「自発的に取り組むことができる」「スポーツ活動によって体育の授業が好きになった」「スポーツは得意である」「スポーツ活動に打ち込んだことがある」の5項目であった。これらの多くは「自発的な競争」の因子に共通するものと思われる。

これに対して、平均値が3.00以上とスポーツ活動を肯定的にとらえている項目は、「気のあったもの同士楽しくできればよい」「人と協力する習慣が身につく」「スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい」「ただ純粋に楽しむべきである」「遊びの延長として楽しんでいる」「ストレス発散に良い」「体力づくりに役立つ」「礼儀正しい態度が身につく」「健康増進のために良い」「体調をコントロールする能力が身につく」の10項目であった。これらの多くは「楽しみ」の因子に共通するものと思われる。

したがって、このグループにおけるスポーツ活動とは、大半が否定的な意識を持つものであり、自発的には取り組めないものである。その一方で、スポーツ活動はストレス発散・体力づくり・健康増進に役立つという意識を持っている。すなわち、否定的な要素は多いものの、「楽しみ」を感じ、「ストレス発散・体力づくり・健康増進」という効果は認めているものと推察される。

vi - 「好き - 得意」

スポーツ活動を「好き」で「得意」と回答したグループは、全体の34.1%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中30項目において、平均値が3.00以上であり、ほぼ全

表6 スポーツ活動に関するグループ分け

	Q2-6の回答が2以下	Q2-6の回答が4以上
Q2-14の回答が2以下	v (嫌い - 不得意) グループ	vii (好き - 不得意) グループ
Q2-14の回答が4以上	viii (嫌い - 得意) グループ	vi (好き - 得意) グループ

項目において肯定的な回答を示した。その中でも特に平均値が高く、平均値4.00以上の項目は、「良い人間関係を得ることができる」「スポーツをすることが好きである」「自発的に取り組むことができる」「快い興奮が残る」「スポーツは得意である」「スポーツ活動に打ち込んだことがある」「ストレス発散に良い」「生活に潤いを与えてくれる」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の11項目であった。これらの多くは「自発的な競争」の因子に共通するものと思われる。

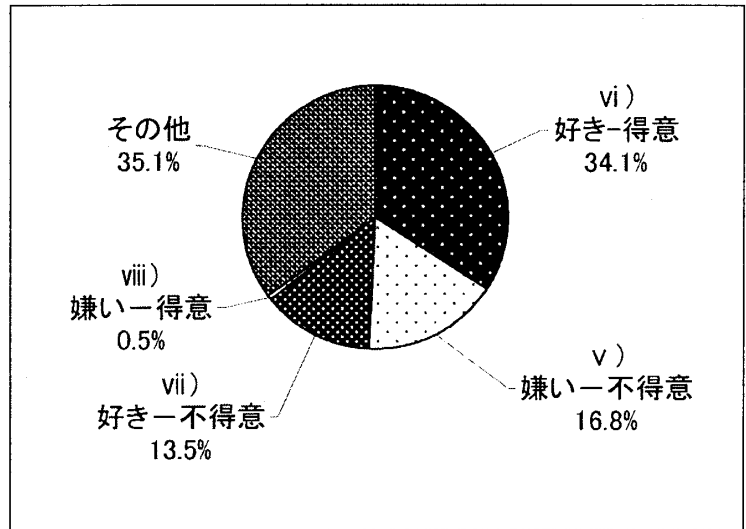


図2 グループ別の割合（スポーツ活動）

これに対して、スポーツ活動を否定的にとらえた項目は、「スポーツ活動では自分の能力が足りないと感じることが多い」の1項目のみであった。

したがって、このグループにおけるスポーツ活動とは、ほぼ全般にわたって肯定できるものであり、好意的なものである。中でも「自発的な競争」という面で肯定的である。しかし、「自分の能力」に対しては不足を感じていると推察される。

#### vii- 「好き - 不得意」

スポーツ活動を「好き」で「不得意」と回答したグループは、全体の13.5%を占めた。各項目に対する平均値を見てみると、31項目中25項目において平均値が3.00以上であり、大半においてスポーツ活動を肯定的にとらえていた。その中でも特に平均値が高く、平均値4.00以上の項目は、「スポーツをすることが好きである」「ただ純粋に楽しむべきである」「遊びの延長として楽しんでいる」「快い興奮が残る」「ストレス発散に良い」「生活に潤いを与える」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」の9項目であった。これらの多くは「楽しみ」の因子に共通するものと思われる。

これに対して、スポーツ活動を否定的にとらえた項目は、「スポーツは得意である」「自分の能力が足りないと感じることが多い」「スポーツする時は常に勝ちたい」「礼儀正しい態度が身につく」「情緒が安定した人間になる」「プロポーションが良くなる」の6項目であった。

したがって、このグループにおけるスポーツ活動とは、グループviと同様に大半が好意的



な意識を持つものであり、「楽しみ」をより強調したものである。そして、ストレス発散・健康増進などに良い効果をもたらすという意識も持っている。しかし、その一方でスポーツ活動による「精神面の向上・体型維持」には否定的である。すなわち、肯定的な要素が多く、特に「楽しみ」や「ストレス発散・健康増進」の効果を認めているながら、精神面の向上や体型維持などへの良い影響はあまりないとの意識を持つと推察される。

#### viii- 「嫌い-得意」

スポーツ活動を「嫌い」で「得意」と回答したグループは、全体の5%であり、サンプル数が極端に少なかったため、比較分析から除外した。

グループの特徴を全体的に見てみると、体育授業と同様に、Q6「スポーツをすることが好きである」に対する回答が好意的であれば他の質問項目に対して好意的な回答であり、否定的な回答であれば他の質問項目に対して否定的な回答であった。すなわち、Q14「スポーツは得意である」に対する回答が、肯定的か否定的かということよりも、Q6「スポーツをすることが好きである」に対する回答の方が他の質問項目に対する回答に大きく関係していると言える。しかし、グループviiiを除くどのグループにも共通して、「スポーツ活動では自分の能力が足りないと感じることが多い」に対して否定的な回答であった。このことから、スポーツ活動において多くの人々が「自分の能力不足」を感じている様子がうかがえる。

## ② グループ間の比較

グループ間の差の検定をするために、全31項目におけるT検定を行った。

### vとvi（嫌い-不得意と好き-得意）

グループvとグループviのT検定の結果、31項目中29項目において、有意差が認められた。この両グループはQ6「スポーツをすることが好きである」とQ14「スポーツは得意である」に対して、ともに相反する回答をしているグループであるため、質問項目の大半において回答に有意な差が見られた。

有意差のあった29項目について各項目の平均値により、両グループとも否定的にとらえている項目、両グループとも肯定的にとらえている項目、グループvは否定的でグループviは肯定的にとらえている項目の3つに分けることができる。

まず、両グループとも否定的にとらえている項目、すなわち平均値が3.00未満であった項

目は、「自分の能力が足りないと感じることが多い」の1項目であった。グループ間に有意な差はあるが、両グループとも自分の能力不足を感じている。

次に、両グループとも肯定的にとらえている項目、すなわち平均値が3.00以上であった項目は、「人と協力する習慣が身につく」「スポーツ活動よりも体育授業の方が楽しい」「遊びの延長として楽しんでいる」「ストレス発散に良い」「体力づくりに役立つ」「得るものが何もない」「健康増進のために良い」「体調コントロール能力が身につく」の8項目であった。こちらは、グループ間に有意な差はあるが、両グループとも「人と協力する習慣が身につく」と感じ、「遊びの延長」として楽しみ、「ストレス発散」などに良いと感じている。

上記の以外の20項目においては、グループvは否定的でグループviは肯定的な回答であった。これに該当する項目は、「自発的な競争」および「精神面の安定・向上」の因子に含まれるすべての項目と「指導者への好意度」「人間関係」「生活や身体面での良い影響」などの要因を示した項目である。

一方、有意差のなかった項目は「気のあったもの同士楽しくできればよい」「ただ純粋に楽しむべきである」の2項目であった。これらはいずれも「楽しみ」の因子に属し、両グループ共に肯定的回答を示した。

以上のことから、「嫌い-不得意」グループと「好き-得意」グループの意識の大きな違いは、「自発的な競争」「精神面の安定・向上」「指導者への好意度」「人間関係」「生活や身体面での良い影響」などであると推察される。一方、「楽しみ」という観点ではグループ間の意識の違いはないと推察される。

#### vとvii（嫌い-不得意と好き-得意）

グループvとグループviiのT検定の結果、31項目中22項目において有意差が認められた。この両グループは、同じようにスポーツ活動を不得意だと感じてはいるものの、好きだととらえているか嫌いだととらえているかで相反する意識を持っており、体育授業と同様、回答には比較的大きな差が見られた。

有意差のあった22項目のうち、「スポーツする時は常に勝ちたい」については、有意差はあるものの両グループ共に否定的回答を示した。また、「人と協力する習慣が身につく」「体育の授業の方が楽しい」「遊びの延長」「ストレス発散に良い」「体力づくりに役立つ」「何か得るものがある」「健康増進のために良い」の7項目については、有意差はあるものの両グループとも肯定的回答を示した。

上記以外の14項目については、グループvは否定的回答であり、グループviiは肯定的回答であった。これに該当する項目は、「自発的な競争」と「良好な人間関係と協調性」の因子に

含まれる多くの項目と「指導者への好意度」「生活への良い影響」などの要因を示した項目である。

一方、有意差のなかった項目は「気のあったもの同士楽しくできればよい」「ただ純粋に楽しむべきである」「スポーツは得意である」「自分の能力が足りないと感じる」「礼儀正しい態度が身につく」「意欲的な人間になる」「情緒が安定した人間になる」「プロポーションが良くなる」「体調コントロール能力が身につく」の9項目であった。これらは「精神面の安定・向上」の因子に含まれるすべての項目、「楽しみ」の因子に含まれる多くの項目、「体型・体調改善」の要因を示した項目である。さらに平均値を見てみると、スポーツ活動の「好き・嫌い」「得意・不得意」に関わらず、両グループ共に「得意である」「礼儀正しさの獲得」「情緒安定」「プロポーション向上」などには否定的であり、「自分の能力が足りない」と感じている。また、「気の合ったもの同士楽しくできればよい」「純粋に楽しむべき」に関しては、両グループ共に肯定的であった。

以上のことから、「嫌い－不得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の大きな違いは、「自発的な競争」「良好な人間関係と協調性」「指導者への好意度」「生活への良い影響」などであると推察される。一方、「精神面の安定・向上」「楽しみ」「体型・体調改善」などの要因にはグループ間の違いはないと推察される。

#### viとvii（好き－得意と好き－不得意）

グループviとグループviiのT検定の結果、31項目中10項目においてのみ有意差が認められた。この両グループは、同じようにスポーツが好きだと感じてはいるものの、得意なのか不得意なのかで相反する意識を持っている。しかし、グループ間の差は比較的小さかった。

有意差のあった項目は、「スポーツをすることが好きである」「遊びの延長として楽しんでいる」「スポーツは得意である」「スポーツ活動に打ち込んだことがある」「自分の能力が足りないと感じることが多い」「競争することが楽しい」「自分の能力に合った活動をする事ができる」「スポーツするときは常に勝ちたい」「意欲的な人間になる」「プロポーションが良くなる」の10項目であった。そのうち、「スポーツが好きである」「遊びの延長」「打ち込んだ経験」「競争が楽しい」「能力にあった活動」「意欲的な人間になる」については、両グループとも肯定的回答を示した。また、「自分の能力が足りないと感じる」については両グループとも否定的回答を示した。

グループviは肯定的に回答し、グループviiは否定的に回答した項目は、「スポーツが得意である」「常に勝ちたい」「プロポーションが良くなる」の3項目のみであった。

一方、有意差のなかった項目は、31項目中21項目であった。これに該当する項目は、

「苦痛の少ない体力づくり」「良好な人間関係と協調性」の因子に含まれるすべての項目と、「指導者への好意度」「自主性」「楽しみ」「情緒・身体面への良い影響」などの要因を示した項目である。

以上のことから、「好き－得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の違いは、「得意だという意識」「勝利意欲」「体型改善」などに限られ、その他の項目についてはグループ間に大きな意識の違いはないと推察される。

以上、女子大学生の体育授業及びスポーツ活動における好意度と得意度の関係について、様々な知見が得られた。全般的に、好意度と得意度は一定の相関関係が認められるものの、必ずしも一致するものではないことがうかがえる。すなわち、得意にならなければ好きになれないというものではないといえる。体育やスポーツに対する考えを左右する因子としては「良好な人間関係と生活の充実」「自発的な競争」を中心とした複数の因子が認められた。また、「好き」と「嫌い」グループの比較では、これらの因子はいずれも肯定と否定に相反する傾向を示し、有意差も見られた。よって、これらの因子が好き嫌いを決定する重要な因子であるということが出来る。このことは、体育・スポーツの実施者がこれらの因子が示す内容について、肯定的な考えを持つ方向へと導く指導がなされれば、「嫌い」が「好き」に改善されることを示唆するものである。先行研究<sup>16)</sup>でも示されている、指導者の役割の重要性は、本研究でも示された。

## ま と め

本研究では、アンケート調査の結果から、体育・スポーツに対する意識についての全体的傾向と”好意度と得意度の違い”から分けられたグループの特徴およびグループ間の差について検討した。結果を要約すると以下ようになる。

### I. 全体の傾向

- ・主成分分析の結果、体育の授業に関しては、「良好な人間関係と生活の充実 (32.9%)」「技能と成績 (11.2%)」「精神面の安定・向上 (7.5%)」「健康と体力向上 (4.4%)」「他人との協調 (4.0%)」と命名した5つの因子と「命名不能 (3.7%)」の1つの因子が抽出され、体育の授業に対する考えの約6割強がこれらの因子で説明できると解釈された。中でも「良好な人間関係と生活の充実」は、体育の授業に対する考えを左右する最も重要な因子と推察された。
- ・主成分分析の結果、スポーツ活動に関しては、「自発的な競争 (33.8%)」「苦痛の少ない体力づくり (7.9%)」「精神面の安定・向上 (7.2%)」「良好な人間関係と協調性 (5.4%)」「楽しみ (4.9%)」

と命名した5つの因子と「命名不能(4.2%)」の1つの因子が抽出され、スポーツ活動に対する考えの約6割強がこれらの因子で説明できると解釈された。中でも「自発的な競争」は、スポーツ活動に対する考えを左右する最も重要な因子と推察された。

- ・ 体育授業では「健康増進」「ストレス発散」「体力づくり」に良い影響を与えると強く感じていた。因子的には「良好な人間関係と生活の充実」「健康と体力向上」「他人との協調」の因子についての項目がこの中に多く認められた。逆に、体育授業による「礼儀正しさの獲得」「プロポーション向上」「情緒安定」などの効果はあまり認めておらず、「自分の能力不足」を感じ、「技能重視の評価方法」に反対していた。因子的には「技能と成績」「精神面の安定・向上」の因子についての項目がこの中に多く認められた。
- ・ スポーツ活動では「健康増進」「体力づくり」「ストレス発散」に良い影響を与えると感じ、「スポーツをすることが好きである」と感じていた。因子的には、「苦痛の少ない体力づくり」「楽しみ」の因子についての項目がこの中に多く認められた。逆に、スポーツ活動による「礼儀正しさの獲得」「情緒安定」「思いやりのある人間になる」などの効果はあまり認めておらず、「自分の能力不足」を感じ、「スポーツは不得意である」と感じていた。これら否定的な項目においては、特定の因子が多く見られる傾向はなかった。
- ・ 体育授業とスポーツ活動を比較すると、「活動への好意度」「人間関係」「遊びの感覚」「生活への良い影響」に対する意識に有意な差があり、全般的にスポーツ活動の方が好意的にとらえられていた。一方で、「指導者への好意度」「自主性」「活動への得意度」「能力」に対する意識に有意な差はなかった。

## Ⅱ. 好意度と得意度の関係

### (1) 体育の授業について

- ・ 「嫌い-得意」を除く全グループにおいて、「体育の授業が好きだった」に対する回答が好意的であれば他の質問項目に対しても好意的な傾向を示し、否定的であれば否定的な傾向を示した。
- ・ 全グループに共通して、「礼儀正しさの獲得」「情緒安定」「プロポーション向上」「体調コントロール能力の獲得」に対して否定的であった。
- ・ 「嫌い-不得意」グループと「好き-得意」グループの意識の大きな違いは、「良好な人間関係と生活の充実」「技能と成績」「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などであった。また、「情緒安定」「プロポーション向上」「体調コントロール能力の獲得」などに対する否定的回答にグループ間の違いはなかった。
- ・ 「嫌い-不得意」グループと「好き-不得意」グループの意識の大きな違いは、「良好な人間関係と生活の充実」「体育教師への好意度」「遊びの感覚」「楽しみ」などであった。一方、「技能

と成績」「情緒安定」「プロポーション向上」「体調コントロール能力の獲得」などに対する否定的回答にはグループ間の違いはなかった。

- ・「好き－得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の違いは、ほぼ「技能と成績」に関するもののみととらえられ、その他の要因についてはグループ間の意識の大きな違いはなかった。

## (2) スポーツ活動について

- ・「嫌い－得意」を除く全グループにおいて、「スポーツが好きである」に対する回答が好意的であれば他の質問項目に対して好意的な傾向を示し、否定的であれば否定的な傾向を示した。
- ・全グループに共通して否定的な項目は、「自分の能力が足りないと感じることが多い」であった。
- ・「嫌い－不得意」グループと「好き－得意」グループの意識の大きな違いは、「自発的な競争」「精神面の安定・向上」「指導者への好意度」「人間関係」「生活や身体面での良い影響」などであった。一方、「楽しみ」という観点ではグループ間の意識の違いはなかった。
- ・「嫌い－不得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の大きな違いは、「自発的な競争」「良好な人間関係と協調性」「指導者への好意度」「生活への良い影響」などであった。一方、「精神面の安定・向上」「楽しみ」「体型・体調改善」などの要因にはグループ間の違いはなかった。
- ・「好き－得意」グループと「好き－不得意」グループの意識の違いは、「得意だという意識」「勝利意欲」「体型改善」などに限られ、その他の項目についてはグループ間に大きな意識の違いはなかった。
- ・以上の成績により、体育やスポーツに対する「好き」「嫌い」を決定する因子として「良好な人間関係と生活の充実」「自発的な競争」を中心とした複数の因子があり、これらの因子が示す内容について、肯定的な考えを持つ方向へと導く指導が、「体育・スポーツ嫌い」の解消につながることが示唆された。

## 引用・参考文献

- 1) 橋本 勲・石井源信・中村寿博「スポーツに対する研究」中京女子大学紀要11:69-79,1976
- 2) 橋本 勲「スポーツに対する態度の研究」体育の科学29- 3 :213-217,1979
- 3) 石井源信・藤江 学「大学体育実技における体力および態度の効果に関する研究」東京工業大学人文論叢5: 1-14,1979
- 4) 石井源信・岩本良裕・古屋正俊「体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析」東京工業大学人文論叢9 :115-127,1983
- 5) 小林 篤「大学保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅱ」名古屋大学教養部紀要

12:87-105,1968

- 6) 小林 篤「体育の授業研究」大修館書店:p.279,1982
- 7) 松島 宏「運動に対する態度についての研究 I」武蔵野女子大学紀要 9 :171-190,1974
- 8) 中田順造・山本章雄・尾縣 貢・熊安貴美江「大阪女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1)」大阪女子大学紀要 24:39-55,1987
- 9) 中田順造・山本章雄・熊安貴美江・吉武信二・尾縣 貢「大阪女子大学生の体育・スポーツに関する研究(2)」大阪女子大学紀要 28:55-69,1991
- 10) 西 順一・橘川 真彦「体育授業における運動の楽しさの実態及び生涯スポーツとの関連」『体育社会学研究 9』道和書院、pp41 - 62, 1980
- 11) 丹羽劭昭・長沢邦子・浅井 修「女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討」体育学研究 25- 4 :251-260,1981
- 12) 徳永幹雄・荒井貞光「学生の体育実技にたいする態度変容とその要因 (第 2 報)」体育学研究 18- 5 :287-294,1974
- 13) 豊田一成「『体育嫌い』の『スポーツ好き』『話題源体育』とうほう、p65, 1990
- 14) 山本章雄・中田順造・尾縣 貢・熊安貴美江「女子大学生の体育・スポーツに対する態度及びスポーツにおける志向性に関する研究」大阪体育学研究 26: 9 -15,1988
- 15) 吉武信二・中田順造・山本章雄・熊安貴美江「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1)-専攻分野から見た体育の授業とスポーツに対する態度および志向性-」大阪女子大学紀要 36:39-51,1999
- 16) 吉武信二「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(2)-指導者への好意度を中心に-」大阪女子大学人間関係論集 20:77-92,2003